

平成30年度 研究助成事業報告

下記の対象者に対し、令和元年9月30日まで助成継続中。

平成29年度 京友会助成対象者

氏名	学年	申請種別	講座	指導教員名	申請内容題目
ふわ さおり 不破早央里	D2	研究集会の参加費への補助	心理臨床学	田中康裕	箱庭療法作品の分類の試み
いしい かよう 石井 佳葉	D3	研究費の補助	臨床実践指導学	高橋靖恵	ロールシャッハ法におけるイメージカード選択の現状に関する質問紙調査
いらい ゆか 岩井 有香	D3	研究費の補助	心理臨床学	桑原知子	中学校の“別室”における現状と教職員と心理職の協働について
ぼう えいせい 彭 永成	M2	研究費の補助	教育社会学	佐藤卓己	ネット時代の結婚情報誌『ゼクシィ』からみる「消費する花嫁」
たけだ もえ 武田 萌	M2	研究費の補助	教育学	広瀬悠三	ヒューム『人間本性論』における「共感」－人間形成論における「共感」概念の可能性

平成31年度 研究助成審査会選考結果

助成期間 令和元年10月1日～令和2年9月30日までの12か月間

京友会平成31年度研究助成事業について、福西清次委員と西岡加名恵委員により審査が行われた。応募は「研究費の補助」について7件あり、申請書にもとづいての審査の結果、6件を採択とした。審査では、研究目的・研究計画・助成金の用途・研究業績書・指導教員の推薦書の記載にもとづき、研究内容の説明の明瞭性や研究計画・助成金の用途の妥当性などを協議した。

その結果、本助成の趣旨にそぐわないと判断された1件の申請を不採択とし、他の6件をいずれも研究的な価値が認められ一定の水準に達しているとして採択した。一方で、①研究計画に示される研究方法についての明瞭性、②申請された助成金の用途の研究計画に対する妥当性、③募集要項に対する申請内容の妥当性などを考慮し、予算上の上限額の範囲内で配分の判断を行った。

2019年5月24日 審査委員 福西清次・西岡加名恵

氏名	学年	講座	指導教員名	申請内容題目
じぶん はんも 鄭 漢模	D3	高等教育開発論講座	飯吉 透	新しい大学像の創造と認識に関する研究－1963～71年の英国オープン・ユニバーシティを中心に－
もとき さちえ 元木 幸恵	D3	臨床心理学講座	高橋靖恵	ロールシャッハ法によるナルシシズムの理解
さかた ちふみ 坂田 千文	M2	教育・人間科学講座	森口佑介	他者と一緒に作業する際の幼児の注意変化と学習に関する検討－並列行為、共同行為、協同行為の観点から－
ひご はるか 比護 遥	M2	教育社会学講座	佐藤卓己	民国期中国におけるリテラシーと大衆動員のメディア史的研究
ピフオー ガルベス マルセロ アレハンドロ PIFFAUT GALVEZ Marcelo Alejandro	M1	教育社会学講座	稲垣恭子	関西地方に居住するイスパノアメリカ人労働者の適応過程－社会文化的側面に注目－
つきかわ せいか 月川 青花	M1	教育・人間科学講座	田中智子	海軍技術者養成機関としての大学－委託学生制度を中心に－

平成30年度 同窓会国際賞の選考結果

2019年5月30日 審査委員 小林哲郎、松下姫歌

氏名	学年	論文題目
呉 江城 (中国)	D1	中国の消費社会化と「小資」概念の変容—『南方都市報』・『羊城晚報』・『広州日報』の分析を中心に
趙 相宇 (大韓民国)	D2	3・1節の周年報道における対日感情の検討—1970年代の韓国社会を中心に

呉氏の論文は、「小資」という中国独自の概念の変容を手掛かりに、「超圧縮された」消費社会化が、中国社会の都市中間層に対する認識および都市中間層のアイデンティティ形成に与えた影響を考察している。この研究は、日本の消費社会化論を比較軸にしたものであり、東アジアの近代化の特質を考える上でも重要な研究意義を有している。

趙氏の論文は、関連先行研究では歴史認識問題が活発化した1980年代以降を扱うのに対し、日韓関係が緊密化し歴史認識問題が抑えられていたと考えられてきた1970年代を対象にしている。韓国の対日感情が抑制と助長という逆のベクトルをもちながらも同じ「自主性」の言説構造の中で展開されてきたことを、丹念な資料調査によって解明し、大変興味深い。

以上のように、いずれも受賞に値する素晴らしい論文であると判断し、両論文を受賞対象とした。また、二人とも素晴らしい語学力を持ち、国際的な活動に従事され、活躍されていることも特筆すべきである。二人の研究生活のますますの発展を期待したい。

平成31（令和元）年度研究助成事業助成対象者コメント —助成を受けて—

■鄭 漢模

この度は、京友会助成事業に採択して頂き、誠にありがとうございます。「大学とは何か」。簡単には答えられない間かと思います。大学はまるで生物のように、進化し続けてきており、今日様々な形を有するようになったからです。例えば、各々異なる「生態系」の中で、英国の大学は3年制、日本の大学は4年制に進化しました。しかし、どちらかの大学が突然「大学」でなくなることはめったにありません。そこには、それらを「大学」と認識させてきた連続性があるからです。

1969年、英国において設立されたオープン・ユニバーシティ（以下、OU）は、そういった連続性に大きな影響を与えた大学です。George Fallisは、大学とは、「常に場所」であり、大学の学びとは「常に同じ時間、同じ場所に集まった人々のコミュニティの中に存在」してきたとしました。しかしOUは、この説明に当てはまりません。OUは、物理的

なキャンパスを持たず、学生たちはテレビ、ラジオを通して自主的に学ぶ大学であり、OUの教員と学生たちは、それぞれ異なる場所、時間の中で、教えもしくは学び、直接対面する機会は非常に限られているからです。

私が本研究を通して目指すのは、こうしたOUを、1960～70年代英国における大学論を踏まえつつ、上述した「場」を含め、「制度」「教育機関」いう3つの観点から、大学の連続性に与えた影響を追求し、最終的には「大学とは何か」に対する答えのヒントを獲得することになります。

頂いた助成金は、主に大学論に関する書籍の購入に充てさせて頂いております。本研究の結果が、大学の過去と現在を究明し、今後の方向性を考えることに少しでも役立てますよう、励んでいきたい所存です。今後とも応援のほどよろしくお願い致します。

■元木 幸恵

この度は令和元年度京友会研究助成に採択を頂き、誠にありがとうございます。

私の研究は、心理療法の中でも精神分析的な心理療法に関しまして、そこで用いられている様々な概念と心理検査、特にロールシャッハ法における概念との異同についての研究をしております。たとえば「不安」という言葉は、精神分析の文脈から広まってきましたが、心理療法・カウンセリングにおいて使われている概念や用語が、あまりにも広く使われてきたことで、同じ言葉であってもロールシャッハ法においては異なる意味まで包含している可能性があると考えております。

そこで私は、社会一般に広まっている概念のうち、ナルシズム（自己愛）、あるいは対人恐怖といった概念に焦点を当てて、幅広く調査や実践研究を行いたいと考えています。この場合、その両方の心性ともに、ある程度は多くの人を持ち合わせていると考えられます。

上記について、まずは大学生を対象に調査（ロールシャッハ法を中心としたもの）を実施しようと考えております。また、実際の臨床例として、私が勤務する精神科栗肉でも調査を実施する予定です。

今回の助成金は、調査等の対象者への謝金や資料購入の一部に充てさせていただきます。本研究の成果が心理臨床家の支援につながり、心理検査を通したより豊かな人間理解に役立つよう、今後とも邁進していく所存です。

■坂田 千文

この度は、京友会研究助成事業に採択くださり、誠にありがとうございます。

私は、他者と一緒にいるときのヒトの注意や記憶に関して研究を行っております。一人でいるときと違って、他者と一緒にいるときにヒトはどのように外界を知覚し、記憶するようになるのかを、認知心理学の手法を用いて解明する試みを行っております。

カメラが外界のほぼ全ての情報を記録できるのに対して、人間の視覚処理には限界があります。全てを見ているつもりでも、ものの存在を見落としてしまうことやどのようなものがあつたのか記憶されていないことがあります。注意は、外界にあるものが何であるのかに関する情報やどこにあるのかに関する情報を処理するのに大きくかかわっています。注意を向けてものを見ることで、そのものが何である

のか、どこにあるのかを長期的に記憶することができます。

同じ部屋にいる他者と一緒に、別々の物を探していると、自分の物を探している最中であっても、ふと、他者の探し物に気を取られ、偶然目に入ったそれが気になってしまうことはないでしょうか。私はこれを実験課題に落とし込んで、どの程度他者の探し物に注意が割かれるのか、また、時間が経った後で他者の探し物が実際にどこにあつたのかをどの程度記憶しているのかについて、検討しようとしています。

いただいた助成金は、調査費用に充てさせていただきます。本研究によって得られた結果は、学会発表や論文執筆によって報告いたします。

■比護 遥

本年度の京友会研究助成事業に採択いただきましたことを、大変光栄に存じております。

私の研究テーマは、近現代中国における読書の歴史です。読書というのは単なる私的な趣味の領域に留まるものではありません。例えば中国には「読書人」という言葉があり、本を読むことをステータスとする伝統がありました。近代に入ってから、知識を持った少数の人が社会的責任を果たすという発想は根強く残ります。

他方で、教育の普及や技術の革新により、徐々に大衆も読書に参入するようになりました。そのとき、政治的な要請からくる動員の発想ともしばしば結びつくこととなります。このように、読書行為に現れる知識人と大衆の関係から、社会の秩序構造の変化を見通せるというのが現時点での私の見通しです。

修士論文で取り扱う1930年代は、まさに読書人口が拡大するとともに、国家的な危機に直面していた時期でもあり、読書に対する様々な期待が交錯していました。大衆の読書を促す言説の分析から、当時の状況を整理することが当面の課題です。現在は、『読書月刊』『読書生活』などの読書指導を目的とする雑誌メディアを調査しています。その先は、中華人民共和国成立以降のことも調べて、卒業論文で取り上げた1980年代以降の議論につなげていきます。

いただきました助成金は、資料収集のための費用に充てる予定です。貴重なご支援に改めて深くお礼申し上げますとともに、有効に活用できるよう研究に邁進する所存です。

■ PIFFAUT GALVEZ Marcelo Alejandro

この助成を受けて非常に感謝している。修士課程の院生で留学生の私にとっては研究に大きく貢献するだけでなく、京都大学教育学部同窓会から信頼を与えられたことという意味する。それで、助成を生かした実りある研究に打ち込む義務の概念を強化すると信じる。

日本における外国人の最大半は東アジアの国から来ているが、ラテンアメリカからの移住も重要な過程である。移民の先行研究にしたなら、ブラジルからの日系人はラテンアメリカ外国人の大部分となっていることから、日系人および出稼ぎ者の現象に焦点を当てた研究がたくさんあることがわかるようになった。しかし、自分の研究は、今までの研究において無視された少数派である日系人ではなく日本文化および家族との直接関係を持っていないイSPANアメリカ人¹に焦点を当てることである。日系人ではない移民は日本に直接関係する家族文化がないから、日系人の文化とその経験と異なると仮定している。こうして、現在、関西地方に住んでいるイSPANアメリカ人労働者の適応過程における主観的な社会文化的体験がどのようなものであろうか？人類学や社会学の視点から、これらの移民者の経験を解明する。移民自身の生活、経験、状況に関連する視点を理解することを目指しているため、データを収集するには、調査とともに定性的インタビューが行われることである。

¹ 18カ国【コスタリカ、キューバ、ドミニカ共和国、エルサルバドル、グアテマラ、ホンジュラス、メキシコ、ニカラグア、パナマ、アルゼンチン、ボリビア、チリ、コロンビア、エクアドル、パラグアイ、ペルー、ウルグアイ、ベネズエラ】のなかで、その国籍のある外国人である。

■ 月川 青花

この度は京友会研究助成事業に採択いただき、誠にありがとうございます。

私は、戦前の日本海軍と帝国大学がどのように連携してきたのかについて研究しております。日本海軍は技術士官の養成にあたって、その教育を帝国大学に依託していました。この制度は、帝国大学在学中の学生の志願者から選抜した者を海軍学生として、毎月一定の学資を支給し、卒業後は海軍の技術士官に任じるというものであり、明治期から昭和期にわたり続いてきました。

こうした海軍依託学生の制度がどのように運営されてきたのかを分析することで、帝国大学の「海軍技術者養成機関」としての一面を明らかにしたいと私は考えています。また、海軍技術者にとって欧米諸国へ留学し、先進的な軍事技術を学ぶことは重要なステップであったため、依託制度の研究と併せて海軍留学制度の全貌も解明していくつもりです。

それにあたり、東京大学文書館所蔵の東京帝国大学の公文書や、防衛研究所所蔵の海軍の公文書、外務省外交史料館所蔵の海軍留学生に関する史料を分析してまいります。また、海軍依託学生でのちに代表的な海軍造船官となった「平賀讓」が遺した文書を検討することで、制度の内実を個人の視点から捉えることも試みます。

いただいた助成金は、主に上記の史料調査費用に充てさせていただきます。そして研究をより一層深め発展させられるよう、努力してまいります。この度は、修士課程一回生という身でありながら貴重なご支援をいただきましたこと、重ねて御礼申し上げます。

私説・京都大学論—「非」体制という ダンディズム（痩せ我慢）

京都大学名誉教授 竹内 洋 氏



京大生の満足感

まず、準備としてちょっとクイズめいたことをやってみたいと思います。四半世紀前にリクルートで「いまあなたが在籍している大学に、将来あなたの子どもが入学したいと言ったら入学を勧めますか」という、ちょっとスクランダラスな調査がありました。自分の行っている大学に子どもが行きたいと言ったら、やめておけと言うんだったら、その大学はどういうことだということになりますよね。100大学でいったい東大は何位だったのか。京大は何位だったのか。東大や京大が1位ではないとしたら、1位はいったい何大学だったか。まず現総長の山極先生、いかがでしょうか。

○山極 東大、10位ぐらいかな。京大が8位ぐらいではないですか。ちょっといいぐらい。

○竹内 ああ、かなりいいところいっていますね。さすが総長ですね。1位はどこだと思いますか。

○山極 1位ね、1位か、どこだろう、慶應大学。

○竹内 ああ、これもいいところいっていますね。なんか靈感が働いているような感じがします。かなりポイントを突いていますよね。尾池先生、どうですか。

○尾池 東大が4位、京大が2位です。1位は、同じで、慶應。

○竹内 尾池先生もあるところでは非常にほとんど接近していますけど。そうしたら、会場の女性の人で誰か協力していただけたら。では、私の知っている前の学生がいますので、高山さんどうですか。

○高山 そうですね、6位と4位で、はい。京大の方が上です。

○竹内 1位はヒントを与えますが、私がたぶん回答を言ったら、やっぱりそうかと思えますよ。

私、もう言ったではないですか。「やっぱりそうか」と。創価大学。はい。元総長と現総長がおっしゃった慶應大学は2位で、この1位も2位もほとんど変わらないんですよ。京大は3位なんですけど、東大は11位です。まあ、いまでもやったらこんな感じかなと思うんです。京大はすごく高いというのは、やっぱり誇りにすべきだなと思うんです。

これ以外に、100大学の学生生活の満足度調査ですと、京大は9位。東大は22位で、一応高い方と考えたらいいですね。ところが、みっちり学べたという充実感となると、皆さんがだいたい想像できるように非常に低いんですね。ところが東大も低いんです。それから、大学で受けた授業の満足度も50位以下。これは私も自分の経験を鑑みて、なんとなく分かるものであります。

Loose Coupling の典型であった京都大学

徐々に本論に入っていきたいんですけども、まず京大生の満足感の源泉というのが、よく言われる自由な学風とか個性的な人材の輩出とかいうことは、世間にもよほど知られているみたいなんです。例えば、教育学部の新生ガイダンスで「先生、京都大学は個性的な人材がたくさん出ると言われていますが、どうしたら個性的な人間になれるのでしょうか」という、はなはだ非個性的な質問というものもありました。

私の時代には、大学というものが非常に緩い組織だったことは確かなのですが、その中でも、京都大学というのは超緩い大学だったのではないかと思うわけです。大学改革以前にはどんな大学にも、「ほとけの何とか先生」というのはいたんですね。単位が足りないと、その先生のところへ行くと「まあ、あげますからレポートを書きなさい」というのが、だいたいほとけ教授のやり方です。ところが、私が学部学生のころのある先生ですが、スーパーほとけ教授なんですね。レポートを書けなんていうせこいことを言わない。「それで、あなたは何点欲しいんですか」と聞くんですよ。そうしたら、だいたい人は60点言うでしょう。あるつわものが出て、先生が「何点欲しいんですか」と言ったときに、「70点」と言ったら、本当に70点付いていたという。こんにち見たら、そういう鷹揚な大学というエピソード、言い換えればいかげんな大学ということでもあろうかと思うのですが、それを組織社会学的に言えば、要するに、隙間の大きな組織体の典型が京大だったんだろうと思います。

組織というのは、パーツが全部きつく相互作用がちゃんとあって、例えば上下関係とか横の関係がきっちりしている組織がTight couplingで、そういうのが、まったくばらばらになるのがDecouplingで、だから前者に行けば行くほど官僚制的組織ですよ。後者はアナーキーな組織みたいになるんだけど、もともと学校とか大学というのはLoose couplingなんです。なぜかと言うと、上下だとか横の関係というのをきっちりとしにくい。具体的に言ったら、大学で言えば学部自治というのは、これはLoose couplingというか、Decouplingの一つですよ。その中でも京都大学というのがLoose couplingのオーガニゼーションの典型的なものではないかと思うんです。

京大的なるものを形成した歴史的要因・地理的要因・構造的要因

では、そういう京大的なるものというのがいったいどういうことで形成されたのか、ということを考えたいと思うわけです。そうすると、歴史的要因、それから地理的要因、構造的要因という三つで、京大的なるものが形成されたというように考えたらいいと思うんですね。

まず、歴史的要因の方から見てみたいと思います。京都大学は第三高等学校の敷地にできたわけですが、もともと自由というのは、三高のよく言われた言葉です。一高が自治だとしたら、三高は自由だということと言われた。その三高の初代校長が、折田彦市先生ですね。この折田先生もまた独特な教育観で、すごいんですよ。「無為ニシテ化ス」、それから「為サザルコトニヨツテ為ス」と言うのだから。もともと教育というのは意図的な働き掛けなんですね。そうすると、折田先生が言うのは、意図的なものは排除しているわけです。言ってみれば非教育的教育、なんだか禅問答みたいな教育観ですが、何か感化というように考えると比較的いいかもしれないのですが、そういう折田先生の教育観も入って、三高の自由というのが出てきて、それが京大の自由につながっていったのだらうと思います。

それから、京都という土地柄もやっぱり影響したのではないかと思うんですね。一高や五高と対比して、三高は断トツで平民が多いんですね。もともと近畿地方というのは士族の割合は非常に低いせいもあったと思いますが、とにかく他の高等学校に比べると町人的だった、それは風俗としての三高生に表れているわけですね。他の高等学校の旧制高校生というのは決まっています、だいたい黒マント。それから、頭はじゃ

んざりというか坊主頭なんですね。もちろん三高生もそういう人は多いのですが、角帯に着流しみたいな人もいるわけですよ。これは典型的に町人風ですよ。それから頭髪を伸ばして油を付けているとか、こんなのはよその旧制高等学校ではあまり見られないんですね。他にも京都の町柄という、土地柄、地理的要因も京大的になるものに影響していると思います。

京大的なるものを形成した構造的要因 ～ 東大と京大の非対称な関係

第3番目の京大的なるものがつくられた形成要因として、社会学的要因と言ってもいいのですが、構造的要因です。京都帝大はそもそもできたときから、非常に東京帝大を意識させられているんですね。初代総長の木下総長は「当大学は東京大学の支店ではない」「小型でもない」ということを言っている。だから、独特の大学にならなくてはいけないと言って圧が掛かっているわけです。ですが、圧が掛かっているのだけ、**「京都大学創立ノ事情」**を見たら、「希望ハ東京ノ帝国大学ノ三分ノ二トスルコト」。最初から引けている感じですよ。3分の2をもらえたらいいよ、うれしいと言って。

最新のデータを見ても、学生数や教職員数は接近していて東大が1.2倍ぐらいです。ところが予算の規模は東大が1.6倍ぐらいです。同じ規模で競争しろと言っているのだったら、まだやりようがあるのですが、そもそも3分の2東大にしておいて、圧だけ掛かっている。独特の大学になれというところに、京都大学の屈折した自負心みたいなものが出てくるのではないかと。その屈折した自負心のたまものがノーベル賞をたくさん取るというところにも表れているのかもしれませんが。

そういう京都大学の位置で、早くも両方を比べて大学論というものが『東西両京の大学』として明治36年に『読売新聞』で長期にわたって連載されました。斬馬劍禅というすごいペンネームですね、現在は講談社学術文庫で本としてあります。彼は、判官びいきとか、もう東京大学についてはくそみそみたいに書いているんですよ。教授は「官学と貴族政治と平凡の学説」「醜陋なり俗物」というのは、めちゃくちゃ悪口ですよ。教育も「小学校的だ」と言っているわけです。それに対して、できたばかりの京大についてはすごく持ち上げています。教授は「学問の独立と平民政治と斬新の学説」と、そこまではいいのですが、「奇矯なる人物」と言っているわけです。教育は「放任自由で開発的、活用的だ」ということを言っています。当時の京都帝大の法科が非常に東大を意識して、自分たちがフンボルト的大学の理念に従って、官僚養成ではないアカデミズムの学校にしたいという意欲が強かったのも、それを見ながら、彼はこういうことを言っているわけでごさいます。それに続けてこのようにも言っているわけです。東京大学を見ながら、京都大学が競っていくのは大変。東京大学の諸教授の学説が穏健平凡だけども、京大の方は「破天荒の説」を立てて社会を驚かすの挙に出でざるを得ない。要するにウルトラC狙いとかホームラン狙いということですよ。だけど、ウルトラC狙いをやったら着地に失敗するということがあるわけです。ホームラン狙いは三振するということがあります。そこでまたすごいことを言っているわけです。要するに「ただにその説の新奇なるのみならず、彼らの行動もまたすこぶる破天荒にして、奇人はますます奇に、快男児はますます快なるの現象を呈し、京都は百鬼の夜行を見るの奇観なきにあらず」と、おどろおどろしいような感じですよ。

ところが、東大と京大の関係というのは、対称的ではないですよ。非対称的。さっき言ったように予算とか規模が3分の2だということが一つ。それから、そもそもいまに至っても東大対京大ということ言うのは京都大学の人だけではないかと思えます。東大の人は、東大対それ以外の大学という構図だと思えます。だから、京大の人は東大対京大と思っているかもしれないけど、向こうの方は全然思わないという非対称的關係も重要です。また、東大の方は、やはりバッシングされやすい存在。世間でも東大の悪口

を言えばウケやすい。そうすると東大生というのは、例えてみれば苦勞する長男・長女、京大の方は苦勞なしの次男・次女みたいな、そういう非対称的な栄光と苦澁みたいなものがあるのではないかと思います。そこで、ウルトラ C を狙えば着地失敗が起きる、ホームランを狙えば三振が起きるといのは、そういう構造の中から京大の学者の特徴が生まれやすいのではないかと思います。

教育学部はダットサン

そろそろ教育学部に移りたいと思いますが、私は昭和 48 年に関西大学の社会学部に就職しました。そのとき関西大学社会学部というのは、当時はできたばかりの学部でしたから、京大出身の先生が多かったのです。心理学とか社会学部ですから、社会学の先生はほとんど京大出身の先生が多かった。

私が親しかった先生は心理学ですが、立派な先生でした。その先生があるとき「竹内君、君には悪いが、文学部はトラックだけど、教育学部はダットサンみたいなもんやな」と言ったんです。私は言われたときに、ああ、そうだな、教育学部はリヤカーだとか大八車と言われただけかもしれませんが、いい方向に考えました。昔だったら小さい道がいっぱいあるわけですよね。路地も。そんなところに入れないから、トラックよりもダットサンの方がよほどいいのではないかと、小回りが利くのではないかと思います。

そこで今回の教育学部の講演があることでカリキュラムの歴史を見たら、やはりダットサンで小回りが利いて、いろんな斬新さを持って出発したんだなということはよく分かりました。発足時の構想に新聞学というものがあったのですね。それも第一講座、第二講座、第三講座と三つもあります。残念ながら、これは実現されませんでした。書類には出されなかったと思いますが、私が聞いたのでは、映画教育とか演劇とかも考えていたということは古い先生に聞いたことがあります。そして昭和 39 年には、日本初めての講座だと思いますが、臨床心理学。同年に教育人間学というものも日本初めてだったと思います。それから昭和 63 年には臨床教育学。これも講座制では初めてだと思えます。

しかも非常勤が非常にいい先生。人文研の先生って、昔は文学部は呼ばなかったのではないかと思います。教育学部はダットサンだから招聘して、具体的に言うと上山春平先生は比較教育学で来て大変よかったんです。比較思想史の授業で、私は 2 年間ぐらい聞きましたが、それ以外に人文研の吉田光邦先生とか、井上清先生とか。それから NHK の人が来て放送学概論なんていうのもあって、大変いろいろ斬新的なことを考えたんだなということを、そういう跡がよく分かります。

「<非>体制というダンディズム（痩せ我慢）」

そろそろまとめに入ります。まず今日のサブタイトル、「<非>体制というダンディズム」は、京大らしさというもののまとめみたいになっていると思います。非体制というのは、体制でもないし反体制でもないということです。主流でもないし反主流でもないということです。

英語に pro とか con という言葉があると思います。pro というのは賛成の方ですね。con というのは反対、anti ということですが、そのいずれでもない。要するに英語でいうと a. a historical とか、つまり歴史に無関心とか、a moral といったら道徳に無関心という意味ですよ。そういう a。京大というのは、a establishment ということだと思えます。だから、京大なるものの a は「ええです」ということでしょうね。

“トラック”と“ダットサン”



文学部は“トラック”



教育学部は“ダットサン”



かすかに笑っていただいた人は、「ええ人」ですということでございます。

そういう立ち位置がダンディズムになるというのは、やはり社会的要件が要るわけですね。一つは、ダンディズムが成り立つためには、自分一人でそんなことを思っても駄目なので、他者、オーディエンスが要るわけです。オーディエンスのまなざしがなければ、ドンキホーテみたいになるだけであると。ところがうまいことに判官びいきという他者のまなざしが用意されて、なんとなく様になるわけです。京大的なものがかっこいいみたいに思われるのは。

それから非体制というポジショニングが意味を持つには、二項対立みたいなものがなければいけない。そもそも、貴族と中間層的な市民との間の両極端があるところでダンディズムというものが生じたわけですね。つまりダンディズムは、一方では功利主義な中間層市民に対する差異化、功利主義の否定。他方で貴族に対しては、自分たちこそ本当の貴族、精神の貴族。

だから、体制と反体制とか、正統と異端とか、正系と傍系というものが存在する中でダンディズムたり得るわけです。まなざしの方は判官びいきがある。結局、京都大学は正統的正統とは言えないのですね。東京大学があるわけですから。ところが、そうしたら傍系的傍系かといえば、そういうことはないわけだから、ちょうど両義性を持っているというところが、一つの美学が生まれる源泉です。

ただ、ここで注意しなくてはいけないのは、もともとダンディズムというのは、だいたいナルシズムと紙一重である。それを自覚しないと、それは美学ではなく漫画になるので、漫画か美学の綱渡りみたいなところがあるのだと思います。美学になるには、非体制という痩せ我慢、そういう意志を持たないとダンディズムにはならないのだと思います。そういう意味で、今日のタイトルに「ダンディズム（痩せ我慢）」と付けたゆえんでございます。

病理集団としての大学と近年の大学改革

もう一つ、京大的なるものはノスタルジーではないということを最後に言いたいわけですね。ここに『A PERFECT MESS』、直訳すると「完全なる混沌」という2017年に出たアメリカの大学論の本があります。messというのは、ごちゃごちゃという意味ですね。この本はどんなことを言っているかということ、アメリカの大学というのは、何か整然としたもののように思うのは、まったくの間違いであるということなんです。要するに悪い言葉で言うと、ごった煮みたいなものが大学になっているのだと。ごった煮になっていることこそが大学のよきものを生んでいるのだということです。

例えばアメリカの大学の成り立ちで、土地付き大学ということで州立大学ができますよね。だけど、それにはいろいろな思惑があって土地付き大学ができた。例えば土地を提供したら人が寄ってくるだろうとか、土地の値段が上がるだろうとか、いろいろな思惑で。だから、何か整然としたプランがあったわけではまったくなく、現に出来上がった大学というのも、ごった煮だと。そして、アメリカの大学を簡単に矛盾として三つぐらい言うわけですね。ポピュリスト、プラクティカル、エリート。

ポピュリストというのは、アメリカの大学は大学スポーツが盛んです。こういう大学スポーツがそもそも大学に必要なかどうかというのもあるわけですが、これは大衆的サポートの意味をになっている。寄付もそうですね。プラクティカルは、役に立つ研究とか役に立つ教育です。エリートというのは、アカデミックな専門研究。この三つは矛盾するものですが、例えばプラクティカルというのは、エリート的な専門研究の超アカデミックなものがあるから、プラクティカルもよくなるのだということです。そしてエリート的な側面は、プラクティカルな視点が他方であるから専門研究もよくなるのだということを使うわけですね。矛盾したものがつなぎ合わさって、大学でなければできないようなことが行われ

ているのだというのが、この本の言い方です。

こういうことを考えると、京大的なるものは、京大だけの特異な現象だと言うよりも、大学的なものの本質を表しているのではないかなという気がします。極端なかたちで、『大学という病』は京大にいたときに書いた本ですが、私は、大学を考えると、病理集団として考えた方がいいのではないかと、大学を解剖するのは病理学でした方がいいと思います。病理というのは、悪いという意味ではないです。

すると、なんと進化医学の知見から見る大学みたいな論文があったのです。どんなことを言っているかという、例えば感染症みたいなもので発熱するというのがあるじゃないですか。体温が上がると、これは下げなくてはいけないということで、必死になって氷で下げていくわけです。ところが発熱というのは、あれはディフェンスなんですよ。体温が上がることによって病原菌の生育環境を悪くするわけですよ。どんどん成長できないようにする。だから、体温を異常だと考えて下げればいいのかというのは、ちょっと駄目なわけです。それなら放置したらいいかという、今度は死んでしまいますよね。要するにコストとベネフィットを考えて、どこあたりまでだったらいいかということだと思います。

大学改革を考えると、大学は世間の人から見たら病気だということは、制度でも慣行でもいっぱいあると思います。それは、ちょうど一種の適応みたいなもの。企業の人にしたらトップダウンは当たり前だと言いますが、それは企業の論理であって、大学は、専門外の人やたらに判断できるような仕組みになってはいけない。世間から見たら病気かもしれないけど、それは必ずしも病気とは言えない。ところが、もう収益とか、効率とか、ガバナンスと言ったときに、ちょうど体温が上がった、これは大変なことだと。高熱でいかにからといって、どんどん氷でも何でも入れて体温を下げればいいのかという発想と、すごく似ているのではないのでしょうか。そうすると大学改革というのは、産湯と一緒に赤子を流すということにもなるわけです。大学を強くするという試みが、かえって大学を弱くすることだって生じるし、大学改革は成功したが大学は死んだということもあるわけです。

それに関連して、やはり近年の大学改革というのは、私は基本的にちょっと変だと思うのは、財務省とか産業競争力会議とか、経済界の意見がものすごく大きいわけです。もちろん経済界からいろんなことを言うのはいいと思うのですが、『ゾウの時間ネズミの時間』というのがありましたが、経済の時間は短期的ですよ。教育の時間、研究の時間は長期的で、経済の時間とは違うのではないかと。それを全部経済の時間に合わせてするということは、どうかなと思うわけでございます。

ここまで見てきた京大的なるものというのは、濃淡はいろいろあっても、その大学が大学である限り、ある程度どこの大学でも見られることではないかと。そう考えると京大的なるものというのは、ある種の普遍性も持ってくるのではないかと。だから、大学改革の時代に、むしろ京大的なるものを振り返って、そこから考えるということも大事なことはないかと。そういうことを申し添えて終わらせていただきたいと思います。長時間のご静聴をありがとうございました。

記念講演：令和元年6月30日（日）

この講演録は当日の講演内容を要約し、さらに講師による改訂がなされた文章を掲載させて頂いております。